

玄義教相見聞解説

法華宗興隆學林學監 株橋 諦秀

一、本書の著作年代

本書（寫本第五七葉）に

次に四教を以て五時に収め五時を以て面と爲して一代諸經を判ずる時、法華經は妙法蓮華經を以て主と爲す。故に本迹勝劣を以て經旨と爲して而も一部共に本門の意なり。委しくは名目見聞に在り云云。

とあり、名目見聞の後五卷たる五帖抄の第二卷に

尋ねて云く、迹と本との案位・昇進の相如何。

答ふ、此の事委しくは一帖抄五時の下に云ふが如し。（佛叢三六六）

とある。故にこの一帖抄は名目見聞執筆中の著にして、名目見聞の第五卷の後、後五卷の前の著述と拜するのが至當である。これを年號を以て云はば文安三年（日隆聖人六十三才）頃である。

二、本書の大意

本書は「玄義教相見聞」と題されているから、天台三大部中の玄義所説の教判について釋した

ように見受けられるが、實は外宣迹面の天台の教相を釋したのでなく、玄義の文章には拘泥せず内鑿本密の天台、即ち當宗の本迹の教相を述べたものである。所謂當宗に於ては三大部中、文句は五義の中の別章たる體宗用を述べ、止觀は迹門の體たる諸法實相を觀ずる觀法を述べたものであるから、此等を去つて總名たる妙法蓮華經を釋し、而も總名の觀心を説ける玄義を取るのである。されば「玄義」の二字は止觀を以て三大部の主体とする台家の意に對する當家の意である。この故に「玄義教相見聞」なる題號は當家の教相たる本迹判を記した見聞の意である。これに依てこの題號の上に更に「開迹顯本」の四字を冠してみればその意を得るのである。

此の如く本抄はその目次にも見られるが如く、本宗の教判する本迹問題をあらゆる方面より論じ、以て當時の天台宗並に諸法華宗の本迹一致説を破して宗祖の本懷たる本迹勝劣義を闡揚したものである。日隆聖人當時に於ては諸門流殆んど本迹を理體に約して論じていて、事の本迹を論じていない。本迹を理體の上に論ずるが故に一往勝劣再往一致に墮するのである。此の點本抄に於ては徹頭徹尾事の本迹を談ずるもので、隨つて本迹勝劣を以て宗旨とするものである。是れ諸法華宗超過獨勝たる尼崎流の法門である。此の故に本抄には「尼崎流唯授一人之秘曲」(第一四葉)とか「尼崎流最極秘傳」(第二六葉)とか、「尼崎流日蓮宗の義は」等と出されてゐるのである。